

# つ か ぐ ち だ よ り

日本基督教団  
塚口教会  
〒661-0012  
尼崎市南塚口町  
2丁目34-3  
電話 06-6429-3019

## 涙をぬぐいなさい

マタイによる福音書二・一三—二三  
沖村裕史

驚かされるのは、聖書が、ベツレヘムで起こった幼児大量虐殺の出来事について、「預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった」と語っていることです。絶句せざるを得ないような言葉です。数ある神学者たちもまた、この「預言の成就」を、素晴らしい出来事として受け止め、説明しようとしています。ボンヘッファーの言葉です。

「マタイが旧約聖書を引用して、それが成就するためにこれらのことが起こったと述べているのを我々は無視しすぎているのではないか。そのことによって我々はこのテキストにおいて、特別に重要であり、かつすばらしいことがらを読み落とすことになるのである。すなわち、イエスにおいて起こることは、神御自身があらかじめ決意しておられたこと以外のものではあり得ない。たとえヘロデの暴虐が行われるというようなことがあったとしても、神がその統治をやめておられるわけではない。これこそ力ある慰めである。」

幼児虐殺という出来事に対する人道主義

的な拒否感のゆえに、聖書の告げる神の御業の歴史をすばらしいこととして受け取ることができないのは不信仰である。むしろ神のすばらしいご計画を感謝して受けとめることが、信仰者としてあるべき姿なのだと言いたいかのようです。

しかし、間違っただけではありません。聖書は、この残酷な行為そのものが神のみ言葉の成就だ、と言っているわけではありません。注意深く読めば、「暴虐さへ神のご計画の中にある」という考え方を、マタイ自身が否定していることに気づかされるはずですが。マタイは旧約の引用をするとき、「主が預言者を通して言われていたことが実現するため」という常套句を用います。ところが、この福音書の中で、これと違う言い回しをしているところがあります。その一つが、この二章一七節です。「こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。」直前の一五節や一章二二節と比べるとよく分かります。幼児虐殺に関しては、「主が言われたことが実現するため」ではなく、「預言者によって言われたことが実現した」と記されています。

これは、残酷なこの出来事が、神のご計画、神の御心によって起こったのではないということとです。「主が、言われたことを実現するためにこのことを起こされた」のではなく、ヘロデの残酷な行為は、「結果として預

言者の言葉を実現することになってしまった」ということを表そうとしているのではないのでしょうか。

わたしたちは、神が全知全能のお方であると信じ、この世のすべての事柄は神のご計画の中にあり、すべてを神の御心として感謝して受け止めるべきであると教えられてきました。しかし、果たしてそうなのでしょいか。シリアだけでなく、世界中で起きている多くの争いのために、今も、たくさんの子どもたちが傷つけられ、飢え、死んでいっていることを、神の御心だと認めることなど到底できません。それらはむしろ、わたしたち人間の罪。「我こそ」「自分だけは」「思い通りに」というエゴイズムと罪の結果であって、それを、この幼児虐殺を、神の御心だと言うべきではありません。

ユダヤ教のラビであるクシュナーが、『なぜわたしだけが苦しむのか』現代のヨブ記』という本の中で、「人々の心の痛みに対して伝統的な宗教はあまり役に立っていない」と語ります。ほとんどの宗教は、「苦しみの中にある人々に、「悲劇も本当は良いことであるし、不幸に思えるこの状況も本当のところは神の偉大なご計画の中にあるのだ」と説得することで、神を正当化しようとするだけで、その人を慰めるどころか逆に、たしなめてしまっている、と言います。

クシュナーは、あらゆる苦難の現実を神のご計画とか神の恵み深いみ心であると言うことに強く異を唱えます。彼は、地震という苦難の現実を取り上げて、それは『神の行為』ではない。神の行為は、地震が去ったあとで生活を立て直そうと人々に勇気を与えることであり、被災者を助けるために

自分にできることをしようと人々を立ち上げさせることである、と語ります。

この言葉を借りるなら、幼児虐殺もまた、神の行為、神の御心なわけではありません。神の行為、神の御心とは、虐殺という人間の罪が露わになったそのただ中で、それでもなお、「激しく嘆き悲しむ声」を聞き、平和を立て直そうとする人々に与えられる勇気であり、被害者を助けるために自分にできることをしようと立ちあがる人々に与えられる愛です。

御子イエスはまさに、そのようにして、神の御心を生きたられました。幼児虐殺を、神の御心として受け入れるのではなく、失われたいのちを覚え、失われつつあるいのちに思いを馳せ、勇気を持って、神がこの世界にもたらしてくださっている愛と平和を作り出す歩みをなしていられました。

ここで、聖書が表現しようとするものは、人間の不信仰と罪に対する嘆きであり、そこにこそもたらされる神の愛、神の慰めです。

もちろんわたしたちは、この世の罪の結果と、そこから生まれくる悲しくも痛ましい出来事を嘆き、涙し、そして心から憎まなくてはなりません。いい加減な解決や気休めを拒否しなくてはならないでしょう。

しかし、それと同時に、この世のどんな暗闇や混乱の中にも、神の御子イエス・キリストがおられることを、勇気と愛をもたらず神の御心が働いていることを、聖書は告げ、そのお方にわたしたちの目を向けさせようとしています。

(二〇一七年一月一三日、  
婦人会一月例会・説教)